醜い男

遊佐ひろみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
醜い男

【Ｎコード】
Ｎ９２９８Ｇ

【作者名】
遊佐ひろみ

【あらすじ】
幹彦は醜い男だった。その醜さゆえに、異性から皆目相手にされず、自棄になって、恋愛の矛盾を妹に説いて聞かす。そうして、もし自分が身を焦がすような恋愛ができるのならば、この命、悪魔にくれてやってもいい、と叫ぶ。ところがそれを悪魔が盗み聞きしていて、この男と一勝負始める。

一

一

幹彦（みきひこ）という醜貌（しゅうぼう）な男は、ある雨の夜、一人むつかしい顔をしながら、手鏡に映る己の顔を眺めていた。その顔は残念なことに、部屋に灯した、小暗い電燈を受けて、ひとしおＧｒｏｔｅｓｑｕｅ（グロテスク）に浮かび上がっていた。とうとう彼は、ぶッきらぼうな気持ちを押さえきれなくなって、言った。

「ああ畜生！　何て僕は醜い男なのだろう！」

彼は腹んばいになって、なおも手鏡の底に映り込んだ、憎っくき我が醜貌を、平手で打った。

「僕はこの顔のお陰で、様々な娘たちから遠ざけられているばかりか、ほんのつい先頃にも、行きずりに入った店の女から、あたしは貴方の顔には恋をする事も愛する事も出来ないわ、などと手痛くやられた。それは口惜しくて、カッと来たから、障子の桟（さん）をつかんで、火鉢を蹴ったように暴れてやった。すると女は恐れをなして逃げてしまうし、店からは建具を弁償させられるし、その時のすさまじさといったら、なかったね。ところがこれでも全部は自分から出た所（せい）為ではないかと、気が気じゃなかった。いったい恋だ愛だのと、つまりは顔じゃないかしらん。ここは羅馬（ローマ）でもないし、僕だって、顔さえこの通りぶッ飛んでいなかったら、今ごろあの女とよろしくやっていない筈はない。」

幹彦は、一人頬杖をつきながら、こうとりとめのない独語（どくご）を尽くしたかと思うと、後はただ、己の心のように朧々した天井へ向かって、漫然と薄目を上げていた。

すると板戸を一まい挟んだ向こうから、夜中を憚（はばか）る女の跫音（あしおと）が、

近づくともなく近づいて来るかと思うと、間もなく襖(ふすま)が開いた。
「あらいやだ起きていた。」
細々と開いた襖の間には、幹彦の寝ながら目を上げている姿に動(どう)顛(てん)した、妹の白い表情があった。
「起きていちゃあいけないかい？　寝られないから、寝ないでいたんだ。お前の方こそ、こんな夜の夜中に、いったいどこから戻って来た。」
「……。」
妹は畳に上がって、音もなく襖を閉てると、しずしずと部屋の縁を歩いて、箪笥に向いながら、膝を落とした。その箪笥は、兄の衣類を収める他に、妹の秘密の衣類を隠す場所とを兼ねていた。
「ははん。」
「なに？」
「いやなに、親父がぷりッぷりする理由が、今に読めたのさ。」
床に腕枕した幹彦には、か弱い灯の光りにさえ、妹の耳のうらまで赤くしたのが、闇に刃の閃くように、はッきりと眺められた。いつもならば、ぐうの音も出ないほど、やいのやいの言ってやる所を、この時ばかりは、それも結構な事だなと、ひとしお落胆の色を隠さなかった。
「はあ。」
「あら？　珍しく叱らないのね。いつもならあたしが知らない男と一しょに居るだけで、兄さんたらすッ飛んできて、あたしの髪の毛をひッつかんででも、つまらない説法をしようとするのに、それが今夜に限って、馬鹿みたいにぼんやりしちゃッて、いきおい流行病にでも罹ったの？」
「流行病とは、お前なかなか上手じゃないか。僕はね、いいか笑わないでくれよ、僕の今夜はね、恋愛の真理というものに就いて、まあ深く掘り下げていた所なのさ。ほらそんな洋服なんかどうにでも放ッといて、ここの、明かるい兄さんの枕もとへ、まあ、お座りな。」

「何を改まっちゃって、いやよ。あたし歩き通しでもう眠いの、明日になさい、ありッたけ聞いたげるから。」
「いいから、さ、さ、ここへお直り。」
「いやッていったら、いやよ。つまり、あれだわね、兄さんあたしの夜帰りに難癖つけるのでしょう？」
「叱るも褒るも、ないじゃないか。いいかい、兄さんこれからお前に手鏡を渡すから、そこに映る自分の顔をよおッくご覧。」
「あれこれあたしが買って抽斗（たんす）に仕舞って置いたやつじゃないの、近頃ないないと思ったら、兄さんなぜそう勝手に人の荷物を掻き回すの。」
「覗いたかい？　そら覗いたのかい？　そうしたら、ほらッ、何か思いついた事があるだろう？」
「え、あたしの顔だわね。」
「もッとよくご覧、よおくご覧な。お前の顔は、その鏡に映りこんだ通り、はなはだ美に欠かない造りではないのかね？」
「美に――――なに？」
「ウー、つまりだ、美しい顔じゃないのかね。」
「まあッ、まあッ、どうかしら！　ついみッたくない顔じゃないなあと思って、お化粧していたけれど、そこまで兄さんに駄目を押されてみると、いよいよあたしは美しい顔に育ったのね！　ねえもッと、もッと明かりをこっちへ寄越してちょうだいよ、ね、ね、」
そこまで話をこぎ着けた頃、幹彦は妹と手鏡を争うようにつかみ合った。
「じゃあ、次には兄さんの顔をよく覗いてご覧な。」
強い灯の明かりに入った兄の顔は、その醜い凹凸に沿うてひょうきんな影をつけながら、妹の顔の間近に合わさった。
「ぶッ、やだッ、夜も夜中に、気色悪いッたらありゃしない。冗談はよして、ちッとは向こうを向いといてちょうだい。」
幹彦は、噴飯する妹の様子をさも満足そうに眺めた後、再び暗がりへ顔を隠した。

「これが恋愛の真理という奴さ。お前には殊に美しい顔があるから、それとは気にも留めずに、言い寄る男を従えて、こんな夜分までお祭り気分でいるが、それが僕と来たら、お前だってぶッ飛ぶくらいの醜貌だものだから、一ぺんだって、女と恋を楽しんだことなどない。こっちで恋をしたって、あっちで恋をしないのでは、僕には一生恋愛というものを味わう事ができない。違うかい？　この面ひとつで、恋もでき、この面ひとつで、一生女に愛されない。僕なんかは、百姓家に産まれた、種が欲しいばかりの女を迎えて、お互いに恋もなく、愛もなく、うん十年も一しょに生活を伴にし、何とか、愛着ていどの、下らない夫婦の未練を勝ち得られるだけの事だろう。ああこの忌ま忌ましさといったら、まるで鼻毛だね！　僕は何が嫌いと言って、矛盾ほど毛嫌いするものはない。或る者には無尽力で与えられ、或る者――――つまり僕だが、そこには庚申薔薇（こうしんばら）の蕊（しべ）についた一露（ひとつゆ）ほども与えられないとは、これが人類の矛盾でなくて、何だというのだッ！　およそ人間に与えられて正当な、天職を、僕だけが永遠に許されない、憐れむべき片羽と変わりはない！　ああたった一度で好いから、両方から走り寄って、力いっぱい互いの胸を抱き合うような、そんな大恋愛に自分をも見失ッて、思うさま恋人に惑溺したいものだなあ！　もしそれが叶うとするならば、この命、悪魔にだってくれてやる！」

二人の兄妹は、兄が極まったのと、夜も深まったのを潮に、互いに枕を並べあって、床についた。

ところが一疋の悪魔が、箪笥のうしろにしゃがみこんで、これを聞いていた。悪魔は、恋愛に惑溺しさえすれば、自分に命をくれてやッてもいいと豪語した、幹彦の言葉を、鵜呑みにして、小躍りを始めた。

『ばかに胸騒ぎがして、遙ばる印度（インド）からやって来てみれば、これは願ッてもない話にありつけたものだ。よし、ここは一つ、この男と勝負をつけて、男がむざむざと女に酔い痴れた所を、案の定、己はその命をとってやる事にしよう。』

二

二

一方、悪魔の耳が自分の話を聞いていたとは夢にも思わない幹彦は、床の中に入ったまま、今しばらくは闇に目を大きくして、漫然と物思いに耽っていた。ところが妹の軽いいびきが耳許に聞こえ始める頃、ほのかに甘ッたるい匂いが室内に満ちて来たかと思うと、彼の意識はだんだん煮くずれるように、朧げになって来た。夢か現(うつつ)か、彼はそのうッとりするような恍惚の狭間の中に、沈むともなく沈んで、それがやがて、ハッと目がさめた気に帰ったかと思うと、いつか彼はにぎやかな往来に沿って歩いていた。目を上げると冴えた月が出ていて、白く照らされた河岸(かし)の縁に柳が連なっていた。そこへ夜風が吹くと、そよと枝の葉が裏返った。これはもう春の夜の魚河岸(うおがし)に違いないと、彼は思い出した。

幹彦は、少し生酔いにあるように、酔漢でにぎわった軒下などへ、チラチラと目を誘われつつ、何でも日本橋の方へと歩いて行った。けれども何所をどう歩いて見ても、珍妙な景色が彼の目を離れなかった。というのも彼が踏んでいる往来では、必ずしもしッとりした美女が、四五人ずつ画のように立っていて、それが示し合わせたように、暇をつぶしている。その又美しい女たちが、たまに恋しそうに、白暖簾の垂れた居酒屋へ消えてみたり、また顔を出してみたり、熱ッぽい息づかいを見せる。が、彼を驚かしたのは独りそればかりではない――――。

幹彦が人々の背中を一つ押しのける度に、およそ自分よりも醜悪な男が、上等な葉巻を銜えながら、毛深い腕を女の肩へ回して、いやらしく笑っている。それがたまさかに目を奪う景色ならば、彼の目はそう脅かされはしまいが、一様にぶ男だけが、周囲を娘たちで

飾り立てて、わッしょいわッしょいと往来から喝采を浴びているのには、やはり幹彦を閉口させない訳には行かなかった。
「これは一体、どういう風の吹き回しだ？　僕など相手にもならないくらいな、化け物とそう変わらない醜い男たちが、ああまで容姿端麗な乙女らに、片脇さえ余さず、にぎやかに抱かれながら、あちらこちらをねり歩く。」
　と今度は驚嘆した目を、そのまま目さがしに変えて、
「では、目鼻だちの整った、男ぶりのいい連中は、いったい今時分、どこでどう暇をつぶしているのだろう？」
　こう思った幹彦は、次には注意ぶかく軒下を歩いて見て、とッつきにハッと飛び上がった。それというのも、さも女に事欠かぬような鉤鼻（かぎばな）の、西洋ふうな紳士が、錆びた金盥（かなだらい）を抱いて、人目も憚らずにおいおい泣きながら、彼の懐に飛び込んだからだ。
「旦那〳〵、どうか、この下らない顔をご覧になって下さいな！　一体どうすると、こんな整った顔の男が産まれて来るのでしょう？　わたくしはこの顔をもッて生まれて来てからというもの、娘ッこ一人、自分の胸に抱いた事なんかありゃしません。おーいおい。ほんのつい先頃にも、行きずり入った店の女に手を出して見た所が、まあ散々に煙たがられてしまって、だんだん聞いてみると、スパイシーでないこの顔に、恋だ愛だのと、そのような感情が、皆目起こらないというじゃありませんか。それはわたくし無二無三に腹を立てまして、お前はこの整ッた顔だちが、一途に気に入らないのか！　といって障子の桟を鷲づかみに致した所、上から下から暴れに暴れたが運の尽き、主人にも勘当をつけられて、今ではこんな身の落としよう。いったい旦那のような、はちきれんばかりのぶ男に生まれないで、どうしてこの世に享楽がありましょうか？　ねえ旦那ッたら旦那ッ！」
　幹彦はだんだん聞くうちに、何でもただならぬ気がして、掴みかかッた鉤鼻をふりもぎふりもぎ、思わずその場から転げ出した。
「いやいや、ついに飛んでもない世になったものだ。あれだけ格好

の好い鼻の男が、これだけある女たちから、まるまる喰いッぱぐれていて、それどころではない、こんな醜い僕の顔へ、あるまじき羨望の眼差しを向けるとは、何としても女たちの価値観が、あべこべに一転してしまっていると見て、ほぼ間違いはなさそうだ。」

幹彦は、腥(なまぐさ)い月明りの吹かれる通りを、また柳の下まで引き返してみながら、軒のつまッた店先、赤い丹(にぬ)塗りの板橋、点綴(てんてつ)した灯の岸向こう、等々から向けられた、石火矢(いしびや)を放つような乙女らの視線を、これまた意識しない訳には行かなかった。

「まてよ」と彼は考えるのだった。「こういう世の中になってしまったからには、僕の立場は一体どうなってしまうのかしら。いやいや僕だって例にもれずに大いにぶ男に育まれたに違いないのだから、今に目を瞑ッていても、女たちが囲い込んで来ない筈はない。なぜって、今ちょッと駆け込んだだけでも、いったい幾人の女たちが僕の勇ましい、いや、無様らしい走りッぷりに、心をトキメかした事か知れない。現に僕がこう一人考えを巡らしている間にも、厚化粧の女房たちが屋根から顔を出して、身を揺すッて児をあやしながら、既婚を怨むようにこちらへ見惚れているではないか。これはいよいよ、血と骨とのようだった僕の念願が、その通り現実になったと考えて見て、ほぼ間違いはなさそうだな。」

彼は差詰めこう考えた後、急に気がすさまじくなって、道中侍のように胸を威張らせたかと思うと、わざわざ女の混み合う板橋の上へ、その足を踏み入れて行った。

そのちょうど橋桁のうしろには、一疋の悪魔がしゃがみこんでいて、これを残らず聞いていた。

『よしよし』と悪魔は首尾よく頷くのだった。『あの男の命は、十中八九は己の手中に落ちた。今に楽々と女に酔い痴れて、鱠のように骨抜きになった所を、あの男の言った、「思うさま恋人に惑溺できればこの命、悪魔にだってくれてやってもいい！」という文句を、眉間に叩き付けて、その通りに命を差し出させよう。』

三

三

その夜のかれこれ同じ時刻に、たまたまこの魚河岸を通り掛かった、一人の少女があった。それがどう思ったか、颯爽と赤い橋を渡って行く、例の幹彦の不味い面構えを一目見るが早いか、しばらくは口をOの字に開けたまま、ただぼんやりと人波に立ちすくんだ。

そこへまた通り掛かったのは、常に皮肉そうに顔を笑わせた、南国育ちの美青年である。

「あいすいません、今あすこの橋の欄干に凭れ掛かっている男は、まあ随分とまずい顔ですが、はたして誰だか知りはしませんか？」

浅黒い肌をもった美青年は、娘の指ざした方角に沿って、うッすら笑った顔を曲げたかと思うと、さも冷ややかに言った。

「あーあーあのお方ですか。僕は何も知りませんが、どうやら今宵よりお目見えになった、飛ぶ鳥を落とす勢いのぶ男らしいですよ。今も行き違った娘たちが、妙にゾクゾクした声を使って、すこぶるぶ男だったわね、などとうわさ話をしていましたッけか。ではさようなら。」

南国の男がけんもほろろに先を急ぎたがるのを少女はびっくりして引き留めながら、

「まあ待って、あたしの話を最後まで聞いて下さい。あたしも今夜ここへ来たばっかりで、何が何やら、ちッとも得心が行かないんです。あなたのような健康的な美青年が、朽ちた垂木のように背中を曲げているし、そうかと思えば、目を疑うような不細工な男が、天下をとッた顔つきを道中見せびらかしているし、まるでこの魚河岸は、あべこべです。」

「あべこべ？　お嬢さんの方こそ、あべこべでしょうよ！　どうせ

こんな整ッた顔になど歯牙(しが)にも掛けないおつもりで、よくまあそんなご冗談を！」
「冗談――――待ってッてば！」
尾があれば静かに垂らしそうな美青年が、黒い月影の中にすッぽり身を隠してしまうと、残された少女は大きく腕を組んで、何かを頻りに考えている様子だったが、やがて決心でもついたのか、ポンと木履を鳴らして、唯一この場で見覚えのある、醜い男の背中を目指して、広い板橋の上を渡って行った。
そのちょうど橋桁のうしろには、一疋の悪魔がしゃがみこんでいて、このとき頭上を走り抜けた少女に目を大きく動かしたかと思うと、ハッと後脳をつかんだ。
『己にはいささか軽はずみでキュートな面があるが、どうも今回もそれが祟ッたらしい。あの男の、その妹まで、己の魔術の巻き添えを喰ッていようとは、いくら目先に迫った、人間の命に目が眩んだとはいえ、己もなかなか物騒な事をしてくれたものだ。だがしかしたかが小娘の一人が、よしんば誤って兄の欲望の世界へ紛れ込んだとしても、ぽッちりと赤く腫れた蟲刺(むしさ)されよりも、害はない。それどころか妹は、兄の貴重な死に目に会えるのだから、己も案外憎い手心を加えたものと考えよう。』
妹が下駄を打ッて、赤い橋の中央へ出て見ると、今も娘たちから恥ずかしがられていた兄は、ぎょッとした目を妹へ下ろした。
「君はひょッとすると、僕の妹じゃないですか？　いやいや、その殊勝(しゅしょう)らしい顔に見誤りはなさそうだ。やれやれいつもいつもそうやって、よく僕の居所を突き止められるものだな。」
幹彦は妹を目の下へ据えながら、彼女と年恰好の変わらない、恥ずかしがった少女の頭髪を抱いて、その匂いを味わった所だった。
「やッぱり兄さんの顔は、そこだけ色を塗ったように、一目でわかるのね。あたし急に魚河岸なんかに立たされたんで、嫌に心細くって、泣きそうだわ。――――あら？　けれど兄さんにしては、妙だわ。おかしいわ。兄さん、兄さん、その頬ずりしている女の子は、その、

カドリールか何かの、稽古相手かしら？」
幹彦は、ゆッくりと醜い顔を撫でながら、さも分からず屋の妹を持て余すように、舌打ちをやった。
「お前ばかを云ってはならないよ。今や兄さんという存在はね、女から女へと引ッ張り凧（だこ）の凧なのだよ。さあ見てご覧、この娘たちの瞳の中に燃える恋の炎をさ。ちょッとやそッと、僕がやる気を見せて、額にキッスでもしたまえな。こいつらときたらまるッきり、紅茶に染みこませた砂糖（シュガー）のように、跡形もなく蕩（とろ）ッけちまうのさ。」
この一とおりでない兄の変貌ぶりには、さすがの妹も生き肝を抜かれて、しばらくは暗い流れを背に、ぽッと立たされていた。が、それでも気を新しくさせて、何か言葉を継ごうとする度に、兄はあてこするように、互（かたみ）がわりに娘たちを引き寄せ、突き放して、嬲（なぶ）った。このようにいよいよ中（あて）られた妹は、その大きな目に熱い涙を押し出して、「馬鹿馬鹿」と拗ねた口しか利かなくなるかと思うと、今度は力いッぱい下駄を打ッて、どッと橋の畔（たもと）へ引き返して行った。そうして柳の葉の淋しそうに垂れ下がった地面にしゃがみ込んで、誰も見ていないのを確かめた後、はずかしめられた心をグッと押さえて、妹は涙に震えた。
「毎回を女から爪弾きされて、腹いせのように油絵の筆を動かす兄さんが、どことといって一途であたしは好きだったのに、今の兄さんと来たら――――。」
月の高さががッくりと下がった頃、すッすッと鼻を啜る妹の脚もとには、川と瀬とが月明かりにキラキラ輝いて、そのわずかな照り返しが、芥（ごみ）の流れついた橋桁のうしろへ、ほんのり明海を見せた。これらの小景に目を向けて、ただポカンとしていた妹は、その橋桁のうしろに浮び上がった、およそこの世にあるまじき悪魔の背中を、はッきりと目の中に入れて、おやと思った。見ると、その小さな悪魔は、小砂利のつまッた土手に尻をつけ、頭上に架かった橋の、その欄干へ凭れた兄の姿を、まるで鉄砲の狙いでも定めるように、まじまじと見張っていた。

ときに強いひらめきが打ち寄せる妹には、これまで見て来たあべこべの世界と、石を投じれば必中するほど間近に座った悪魔とを、平行に思い浮かべながら、これらが一体なにを意味するのだか、その答えに行き当たるのに、少しも時間を費やさなかった。

「ははん」と冷たく笑った妹は、木履の鼻緒をつまむと、冷たい土手の上を、ひたひたと素足で下りた。それから兄へ食い入るような視線を上げている悪魔の、その背後からだんだん忍び寄って、妹は、握りやすいその首根を、ギュッと強く搾った。

「あらいやだ。おしゃまな小猿を捕まえたかと思ったら、なんて小さな悪魔がいたものだろうね？　このあべこべの世界は、残らずお前のしわざ？」

不意を喰ッて飛び上がった悪魔は、大きな目ん玉を上目にさせて、しめしめと笑った妹と目を合わせたかと思うと、さも「しまった」らしい顔をして、その場でもがいたり、身をちぢめたり、無二無三に逃げようとした。

『いつの間に……くそッ！……放せ……放さないかッ！　己さまは世にも恐ろしき大魔王の僕（しもべ）ぞ！』

これを聞いても妹は、ガタガタと身を震え上がらせもせずに、ただニヤニヤとしながら、悪魔の身体を腕いッぱんで支えていた。

『ええいッ！　悪魔を恐れぬとはこのあまッちょめ……しからばお前の体を三匹の轡虫（くつわむし）に変えて……焼いたり焼かなかったり、やッぱり焼いたりしてしまおう！』

妹はやはり何とも答えない変わりに、つかんでいる悪魔の頭をいきなり川の底へ沈めて、ざぶざぶと激しくやった。

『ぶはッ……よしよし、わかったわかった。お前の願いを何という条件もなしに、二つだけ叶えてあげる。』

「きっと嘘だわ。」

『ハッハハハハ！　悪魔は嘘を吐く、これは人間界では一つの名物にもなっているようだが、いやいやそうではない、確かに我々魔族は、挨拶がわりに嘘を吐く。しかし一たん人間と契約を交わした後

では、我々は契約の虜となって、それ以外を忘れてしまう。ロシア人の書いたものの中に、我々はそう働いている。』
「契約？」と妹は水を切ッて悪魔を川底から引き上げながら、「悪魔の契約って、何かの本で読んだことがあるわ。嘘にしては嘘っぽくないわね、じゃあ願いは二つも要らないから、一つだけ叶えてもらおうかしら。」
『ハッハハハハア！　欲がないぶッ！――――ないですなあ……それでは、その願いというのは、どういったご用件でございましょう？』
そこで妹の一つの願いは悪魔の耳に語られた。
『ははア、なるほど恐れ入りました。いえいえやりますとも。――――それではお姉（あね）えさま、わたくし、このぶら下がったままの情けない姿では、何事も極まらないのですから、手前のむさ苦しい小首にお掛けになった、その愛らしいお手（てて）を、そッとお外しになって下さいましな。』
妹のつかんだ悪魔の首が、すッかり彼の思い通りになった頃、いきなり川の水が岸の上を這い出して、妹の上を下へと争ッて堤に上るのを待たずに、土砂を噛んだ真ッ黒い鉄砲水が、なみなみ川岸へ押し寄せた。
『カッカッカッカッ！』と悪魔は腹を抱えながら濁流に流されるのだった。『どんな卑劣な手段を使おうとも、己さまの首さえ自在なれば、この通り川を氾濫させるなど、お安い御用だね。なぜッていってご覧、己はこの喉を笛のように吹かせて、魔術をかけるのだから、お前の手から逃れたこの喉笛が、今からこの世界にどんな天変地異を巻き起こそうとも、何ら不思議もないねえ。それと、よくもよくもこの己さまに末代までの恥じをかかせてくれたね。ありがとうございました、なんて悪魔が頭を下げるとでも思ったのかい？　カッカッカッカッ！　よし今度はそのお返しに、お前にはあらゆる絵本になってもらって、その結末のページだけをくり貫いてやったとしても、実にユニークに違いないなあ。だがしかし、己にはお前

の兄の命の方が、もう少しといった所で手に入るので、はなはだお前には関心が薄い。薄い薄い！　まあ、二度と己の寝首を掻こうとはせずに、その見窄らしい柳の葉を手巾がわりに噛みしめて、自分の兄の没世（ぼっせい）の瞬間を、心待ちに待ちわびているんだな。』

悪魔は、橋桁をすッかりのみ込んだ川の早瀬に片足いっぽんで立って、蜘蛛（くも）が笑うとしたらこんなだろうと思われる、さも忌ま忌ましい笑い方を、月に向かって盛んにやった。

『それから』と悪魔は、さも『それから』らしく眼ばたきを一つして、『それからお前がつい今し方口にした願いについては、己はまず叶えてあげられないと思ってくれて差し支えない。お前は悪魔の大嘘を信じてくれたのだよ。もっとも騙された相手が嘘つきの大家とあっては、お前も潔くあきらめがつくだろう。あッ！　お前ひょッとして今、この場から走って逃げて、逃げられない事もないと、本気で期待したのではないかい？　図星だったかい？　ハッハハハア！　一ついい事を教えてやろう。お前ら兄妹はね、己の拵えたこの魔術の魚河岸以外に、屠殺場（とさつじょう）の戸口の椅子の下にさえ、自分たちの骨を埋める所を持たないでいるのだよ。あの向こう岸にひしめき合った墓群を、よーッくご覧よ、あすこにはお前ら兄妹のように、己との勝負に悉く敗した人間、つまりお前たちの先人方が、おーいおいと忍び泣きして、夜土に眠っているんだよ。カッカッカッカッ！』

『ああそれから』とまた、悪魔は『ああそれから』らしく上唇を舐めながら、『ああそれからね、これが勝負というからには、幾分でもお前に公平さを欠いていると思ったから、張り切って教えるよ。いいかい？　悪魔は何でも一度しか云わないから、よく聞きな――――。

もしもお前が、お前の兄のとぼけた心を説伏させて、兄が自らの決心によって、このあべこべに蠱惑（こわく）を極めた世界を、スパッと否定する事が叶ったのなら、この魔術の世界は、己にも、神にも、誰にもわからないものになってしまうのだよ……カッカッカッカッ！』

水の中に石を投げ込んだように、夜空に一つ穴が空いて、悪魔はその中へ飛び込んだかと思うと、今まで堤際(つつみぎわ)まで押し寄せていた川の早瀬は、また何事も起きなかった以前のように、たッぷりと広い瀬を見せながら、皓々(こうこう)と月明かりに照らし出された。

四

四

しばらくは尻居（しりい）に倒れていた妹、衣類を川水に湿らせつつ、驚嘆の眼をあきながら、依然として悪魔の術中に置かれている現実に、落胆の色を隠せなかった。そうして自分にとって、ゆいいつ現（うつつ）へ戻る頼みは、女に惑溺しかかった兄を説伏させて、正気に起こさせる他には、なに一つ手だてがないのだと、そればかりがハッキリとしていた。妹は、これはまた大役だと思わずにいられなかった。

「顔の容貌がまずくって、愛しい人から平手されて育ったような兄さんにとって、あべこべにそれが理由で美女たちから猫可愛がりを受ける、この魔術の世界では、きっと天職を見いだした人間のように輝いて、夢にもこの世界を否定しないわ。つまり、どうしたってあたしの説伏には、悪魔の肩をもってでも、聞く耳を持たないでしょう。」

それでも妹は、やはりこの魔術の世界を兄に伝え、そのいんちきに気がつかせる為に、また下駄の歯の音を響かせない訳にも行かなかった。

「どいてどいて！」と妹は女の山を掻き分け掻き分け、馬鹿な兄の許へ急き込むのだった。「兄さん兄さん！　しかじかの理由で、この魚河岸一帯には、悪魔の恐ろしい魔術がかかっているの。そうして兄さんが女に溺れた所を、悪魔は昨夜兄さんの云った通りに、その命をとりに来るわ。そんなら、兄さんは夢のような女たちをいち早くに見限ッて、あたしと一しょにこの魔術を解かなければ、兄妹して永遠にこの魚河岸へ骨を埋めることになるのよ！」

ところがと言うべきか、当然と言うべきか、しげしげと女の尻を見上げる兄には、妹のこの落語じみた話になど、一つも貸す耳をもたなかった。

「しッ、しッ、あっちへお行きったら、お行きよ。どうも近頃のお前ときたら、兄の女遊びの邪魔ばかりが面白いようにやるじゃないか。あんまり兄さんの云うことを聞けないと、ここから下の、一月のように冷たい川の中へ、すぽッと投げこむよ。」
「兄さん！　兄さん！　もう兄さんと言えば！」
『無駄だよ』と悪魔は直せつ妹の頭の中にささやくのだった。『無駄な努力だよ。お前の兄は、今や自分になびく女に熱くなって、妹の退屈な話になど、一つも聞き届けられないのだよ。それならさっそく、己さまはいつもの三つ叉の槍を手に、いよいよお前の兄の命を頂きに参ろうかね。』
　こう悪魔がせせら笑う間にも、負け嫌いな妹の目からは、大つぶの涙が押し上がって、そのままカーッと目の前が熱くなったかと思うと、いきなり兄の頬を平手でうった。
「この分からず屋のとんとんちきッ！　兄さんはぶ男で、ぶ男の兄さんの所へ集ッて来る女なんか、ふんどしの押し売りか悪魔の手下くらいしかないって事に、なぜもっとすみやかに気が付けないのよ！　この馬鹿の馬鹿の馬鹿の、大ッ馬鹿ッ！」
「大ッ馬鹿？　おいよくも云ってはならない事を平気で言ってのけたなこの小便タレめッ！　兄の頬ッぺたをうつ妹がどこの世にいるッ！　何て狼藉（ろうぜき）な女だッ！　同じ母親の腹を使った妹と思えばこそ、鏡のように澄んだ心でお前を眺めて来たが、もうそれも今夜かぎり、いよいよお前とは兄妹の縁を断絶せざるを得ない！」
　とうとう鼻の穴をふくらませた兄は、まッすぐにらみ上げる妹の襟首（えりくび）を、にぎるか、つかむかして、そのまま砂袋を放る要領（ようりょう）で、妹の小さい体を投げた。
『ハッハハハア！』と腹を抱えた悪魔が、爆竹（ばくちく）の爆（は）ぜるみたいに、月の上に躍り上がった。『もうこれ以上の惑溺はないよ！　自分の妹をうち捨ててでも、女の胸に頬ずりするのだから、仕方がないじゃないか。己もようやっと、強情な印度（インド）人に引き続いて、心もろいと評判な日本人の、その命をとることが、今に叶のだ。カッカッカ

ッカッ！』

欄干の一方のつけ根に、胴を丸くつッ伏した妹の、その下向きの顔が、くやし涙に砂をまぶした、悶え泣きに汚れているのかと、胸をわくわくさせながら忍び寄った悪魔は、そこへクスクスとすすり笑う忍び音に出会って、今までの絶倒をぴたッと静めた。がんらい、手を打ち鳴らして雀躍りすべき悪魔の表情は、次第次第に下から妹を覗き込んでいく内に、そこへ想像だにしていなかった、ニヤニヤした照れ笑いに鉢合わせて、彼はぎょッと毒気を抜かれた。

『おい貴様ッ！』と悪魔は全身をもがいてまごつくのだった。『おい貴様は何をそんなにほほ笑ましくしているというのだ！　兄に捨てられて、その兄の命も、いまに亡くなるという寸前を見計らって、この世にいかなＨｕｍｏｒｏｕｓがあるというのだ！』

所どころ砂のかぶッた袖口を叩きながら、妹がぼちぼち立ち上がった前後にも、やはりその顔のニヤけた点が、片時も悪魔をホッとさせなかった。

『やい貴様ッ！　貴様貴様貴様ッ！　己の質問へせっせと答えろ！　こんな屈辱の汀に立たされて、ナニがナニするとそんな笑顔になれるというのか、ちゃんとした返事によっては、貴様だけをこの魔術の世界から逃がしてあげてもいい！』

妹は腹を大きく抱えながら、いよいよ笑いが治まらない様子で、悪魔のふくれッ面を一つ世界から閉め出すように、その声は魚河岸のあちらこちらに高鳴った。

「あー苦しいったら、ないわ。ふふふ、まあ可笑しい！　あたしね、可笑しいの。くふふふ、だって、だってね、金甌無欠のように思えたこの魔術の世界に、こんなつまらない、そして底抜けな欠点が、ただ一つだけあったのだもの、そりゃ誰だって、ぶふふふふ、吹き出さずにいられないわ。あたしも、兄さんも、お前のような悪魔だって、この欠点を忘れて、飛んだり跳ねたり、まあ色々に血相を変えて、今にして思えば、ひとしおお尻がこそばゆいわ。」

『欠点だと？　カッカッカッカッ！　悪魔をつかまえて嘘を拵える

など、よちよち歩きの赤児だね。』

「まあ無理もない。これは悪魔でも思いも寄らないような、もッとも馬鹿馬鹿しい人間の矛盾なのよ。けれどもね、これでも勝負の内にあるというのなら、その勝敗の行方には、必ずしもあたしだけが、輝ける勝利の丘に、ぽつねんと立たされているようね。」

悪魔は驚嘆の目を見開いて、この歳は十三四の小娘の姿を眺めた。が、その小娘が彼の魔術の欠点に気が付いた一人だと云う事を知った時に、彼の驚きは果してどれくらいだったか。大胆にも悪魔の目ん玉を、右から左へと追わせた妹は、赤い橋の畔から柳の葉をわけながら、どッと人のにぎわいそうな、灯(ひ)のかんかんと燈(とも)った軒下ばかりを目さがしして、その中へ消えて行った。

『己は悪夢に悩まされているのかしら』と悪魔はしなしな萎(な)えて、尻居に落ちるのだった。『あの妹のいう事が実際だとすれば、己はどうやら大きな過ちを犯しているらしい。それも悪魔でも思いもよならい、というからには、己には到底わかるまい人間の矛盾が、この美事な魔術の大壁に、たった一つの風穴をあけて、千年も二千年も、間が抜けていた事になる。ああ忌ま忌ましいッたら、ないね！

己も長らく悪魔をやっていて、こんなにやりよくない相手は、あの宇宙好きな猶太(ユダヤ)の爺さんの他は、なかなか味わわずに生きて来た。さっそく兄妹の両命を、この手のひらにとり上げたとしても、己は永遠に己の魔術の中に、大いなる風穴をあきながら、スースーとすきま風にあてられて、残った悪魔の半生を全(まっと)うしなければないない！　ああ返す返す忌ま忌ましい女だッ！　この上は、兄の命をとるのを幾ぶん見送ってでも、妹の出方を窺うに他あるまいか。』

悪魔は進退に極まッて、塗りの剥げた欄干へよじ登ると、小さくしゃがみ込んだ。そうしてその内に、大勢の女たちの話声が、サワサワとさざめき出すかと思うと、盛況(さわが)しい暖簾の間をくぐッて出て来た妹の、その殊勝らしい顔へ、彼は、見るというよりは、むしろ睨むように、大きな眼を動かしていた。

妹は傍(かたわ)らを、一人の男に伴(ともな)いを受けながら、夜風にザワつく柳を

くぐりくぐり、板橋の中程まで同道(どうどう)した。と同時に、さざめきだった女性の一団も、それを追う形で、橋の上ならどこでもひしめき合った。悪魔は四五十を数える人出を目に入れて、これが己の魔術の欠点かと、眉があるならばそれをねじ上げるように、不思議がった。

『待て待て、わからないじゃないか？　人間はこれだけ仰山ひろわれて来ると、己の魔術は破られるのかい？』

「いいから」と妹は一人の男を脇に挟んで言うのだった。「いいから静かに見ときなさい、これから兄さんの、つまり人間の矛盾を見せてあげるわ。」

五

五

それとちょうど同じ頃、幹彦は欄干を背に両ひじを置きながら、自分に首ッ丈の娘たちを一列にして、その一つ一つの吟味に迫られていた。が、だんだんと橋の上を人々がひしめき合うようになったので、恋に餓えた目を忌ま忌ましそうに逸らすと、見るともなしにすぐ自分のうしろへ一瞥を加えた。すると自分の妹と、それから見知らぬぶ男とが、きれいに顔を並べて立っているのには、ちょッと意外そうな目にまばたきを一つした。

「おい何だいこの女の旗行列は？　またお前の差向かい？　まったくお前のしつッこさと来たら、人家に味をしめた野良猫と変わらないじゃないか。今度は急に人で橋の上を混ましたりして――――はは ん、読めたよ。何でもこれからおしくら饅頭でも始めて、その勢いを殺さずに、仕返しに、僕を橋の上から突き落として溺れ殺す寸法だな。さすが兄妹の縁をきッた奴だけあって、中々せこい真似を考えるじゃないか。」

ところが妹は、ニヤニヤと兄の顔を眺めたかと思うと、次にはひッ張って来た男を引き合いに出すように、強く抱きすくめながら、

「兄さん兄さん、この人が魚河岸で一番の醜い男だそうよ。」

と、幸福そうに言うのだった。兄は、始めこそ冗談のつもりにしていたが、エヘヘと一足まえに立った、血便そのもののような醜い面を見つけると「こりゃひどい醜貌だ」と鼻の先ッちょを摘まんだ。幹彦にたけなわだった娘らも、替わる替わる彼の所に立って来て見ては、「あら醜貌、醜貌」などと恥ずかしがった。妹はそれらへ満足そうな目を向けながら、なおもこう続けた。

「この人は名を糞尾利金太さんといってね、連日入った店の壁を使って、百八人もの嬲物たちを立たせて、それがズラズラ十三列にな

った所を、自分をどれだけ愛しているか、朝まで披露させて、一人一人から慰められる、一ぷう変わった人なの。」

幹彦へチラチラと目を上げて、糞尾ははにかんで見せながら、「いやいやお嬢さん、十四列ですよ十四列。どうぞお間違えなく」と頭を掻きムシッて虱(しらみ)をにぎった。

「早い話がね、兄さん。あたしはつい今さっき店に入って十三列の嬲物たちを眺めた後、やっぱりあたしもこの人に一目惚れをして来たって訳なの。ところが糞尾さんも絵から出た美人に出会ったとばかりにあたしに一目惚れをしたから、これは何でも都合がいいという事になって、あたしは糞尾さんとの結婚に頷いたの。そんなら、兄さんに報告しない手はないから、こうして新郎新婦二人そろって、まあ兄さんのお楽しみの所をお邪魔したってわけ。あらなぜッて、女に生まれたからには、猫も杓子(しゃくし)もそうしないわけにはいかないわ。こんなぶッちぎりの醜い男のお嫁さんに選ばれて、一生胸を焦がして暮らせるだけでも、今から女心が燃え盛るわ。ねえ糞尾さん？」

「お義兄(にい)さん」と魚河岸きッてのぶ男は、糞に目鼻の開いたような顔を、幹彦の間近に突き出した。「お義兄さん、あっしは今は身分をやくざ者に置いてはいますが、この顔の恩恵で一度も米塩に困った事はありません。時にあっしがお義兄さんの妹さんと一目合わさった時より、恋もしました、愛もしました、やはりあっしが魚河岸でいッとう醜貌という評判が、お義兄さんの妹さんと、あっしを相惚れにさせやした、これはあっしにとっては珍しくもない話ですが、今の所はあっしの嫁さんとしてこの妹さんを貰い受けましょう。ですからお義兄さんとあっしは、誰がなんと言おうとも、晴れて義兄弟に結ばれやしたから、以後お見知りおきを。」

糞尾はぺしゃんと一つお辞儀を済ませると、後は務めを果たした役人風に、横柄に煙草をふかし始めた。その姿は見れば見るほど、任侠欣ぶべき芸者に退治せられる、敵役(かたきやく)の寸法へすッぽりとハマッていた。この敵と義兄弟になった暁(あかつき)には、いかな不快な思いを覚悟しなければならないか、想像するでさえおぞましいとばかりに、兄

は不足らしい顔に眉をつけて、したたるほど幸福らしい妹へ、驚嘆の目を下ろしていた。そうしてその内に、「おいちょッと」と、さも「おいちょッと」らしくまばらな髭を撫で下ろしながら、妹の腕の輪を引ッたくって、糞尾をその場に置き去りにした。

「おいちょッとお前はココがどうかしちまったのかい？　あの面をよーッくご覧になって、もう一度自分の心を確かめてご覧な。あれじゃあクソ味噌がいい所じゃないか。何だって、あんな敵役をつらまえて、結婚を叫ぶのさ。ほかにだって、ほら兄さんよりも立派な目鼻立ちの、汚れてはいるが西洋ふうの紳士が、軒下に金盥を抱えて、うろりうろりとしているじゃないか。ちッとはこの川風に頭を冷やして、もう一度よく考え直してご覧。」

「頭を冷やせ？」と妹は声に鋭さを加えるのだった。「あら兄さんご自分で何を言ったのかその意味をちゃんと分かってらっしゃるのかしら？　あんな醜貌をつらまえて、それをまさかハンサムなんかと比較して、お前頭を冷やせだなんて、兄さんまるであべこべだわ！　兄さんだってなかなかの醜貌だけれども、糞尾さんの方が、輪を掛けてど醜貌なのだから、ちッとも構わないじゃないの。それとも何かしら、ほかの娘たちは良くっても、あたしだけは醜い男を好いちゃいけないッて、こう言うの？」

「ああいけないよ。お前には幸せになってもらわないと、兄さん最も困るんだ。なぜッて言ってご覧、ハンサムばかりが男の上げ下げにはならないけれど、お前には夫を世間に出しても気恥ずかしい思いをしない顔と一しょになって欲しいんだ。血迷ッても、あんな糞尾（くそお）だか臭尾（くさお）だかという、目のやり場に困るようなひょッとこと一しょになってもらいたくない、何もこれはお前のえり好みばかりが問題じゃなくてね、あれを義弟にもつ身にも、あれの親戚になる親父の身にも、命懸けの問題なんだよ。そりゃお前お袋だって――――なんだいお前蛸みたいな顔をしてさ。兄さん何も誤った事を説法していないだろう？」

「誤っていない？　まさか兄さん本気でそう思っているの？　そん

なら兄さんそれは矛盾というものよ。違う？　自分はこの魔術の世界で醜貌に甘んじてウマウマ楽しんでいる癖に、なぜあたしがそれと同じように醜貌と結婚をして楽しもうとする時に、足を掛け、袖を引ッぱるのかしら？　自分の醜貌に惚れる女たちをお認めになるなら、あたしと糞尾さんの結婚もお認めにならなくては、すべて嘘だわ。」

「嘘でも矛盾でも、嫌なものは嫌なのだもの。わからないかい？　兄さんのこの感情は何も兄さんばかりじゃあない、湯屋の番頭だってもっている感情なのだよ。お前が本当に糞尾と結婚するというなら、僕はこのあべこべの世界をいっさい焼き払って、焼け野原にしてしまうよ。」

「まあ乱暴乱暴。でもね兄さん、何もこの世界を焼き払わなくっても、あたしと糞尾さんの結婚をやめさせられる方法が、たった一つだけあるわ。」

「方法？」

「そう。その方法とはね、兄さんがこのあべこべの世界の女たちに惑溺しないで、それらを今すぐに否定することよ。尤もでしょう、この世界は悪魔が兄さんの命をとるためだけに急ごしらえで創った、あべこべの世界なの。だからあたしが糞尾さんと結婚するのも、あべこべから出発しているもので、それが否定されて、魔術が説けてしまえば、元通りあたしは兄さんの望むような相手を見つけるわ。そうでないと、あたしは糞尾さんと心中でも何でもして、手ずから一しょになる決意だから――――。あら糞尾さんが汚い目であたしを呼んでいるわ、ではさようなら。」

　とうとう妹は花嫁のお別れを告げて、そこへ兄を一人ほッたらかすと、吸い殻を川へ投げ入れる新郎の許へ、浮き浮きした下駄の歯の音を響かせて行った。

　幹彦は、餓えた目で欲しそうに美女を眺めたり、忌ま忌ましい目を横目に糞尾を目の敵にしたり、春の夜の魚河岸に物凄い時間を過ごしていたが、その内に何か決心でもついたのか、やがて女を押し

のけて板橋の中央まで出て、そのまた寄って来た女たちを手のひらで制すると、後にはこう大声に叫んだ。
「妹の説教はもっともなものだ。僕の心にはハッキリと矛盾が見られる。僕は何が嫌いと言って、やはり矛盾ほど毛嫌いするものはない。これが人類の矛盾でなくて、何だというのだッ！　誤った心をしているのは、妹でもなければ糞尾でもない、それはまったく僕の方だった。僕がぶ男の好かれるこの世界に賛同するには、妹の結婚も賛同せねばならない。また妹の結婚を否定するには、ぶ男の好かれるこの世界を否定せねばならない。僕はどうしたって十三列に嬲物を立たせる、妹の結婚相手を認める訳には行かない。したがって僕はこのぶ男の好かれる、現実とはあべこべの世界を否定しなければならない！」
　すると欄干の上にしゃがみ込んで、残らず聞いていた一疋の悪魔が、口々に何かののしッた声を上げたかと思うと、さも忌ま忌ましそうに三つ叉の槍を投げ捨てて、そのまま橋の上へゴロンと横になった。そうしてその内に、今まで美しい美しいとため息して眺められた、魚河岸いったいの若い女たちが、次々に石のように動かなくなって行ったかと思うと、どの人の形もだんだん怪しくなって、終いには豆腐を殴ッたようにドロドロと身を毀(こわ)しながら、柳の葉を揺らしてやって来る風に、白い残った泡ぶくだけが、春の夜の魚河岸に舞い上がった。それが敗北に似たほのかな匂いとなって、幹彦の消えていく意識の中をいつまでも漂い続けていた。
『これが己の魔術の欠点であり、人間の矛盾という奴か。ええい忌ま忌ましいといったら、自分を殴った相手を取り違えて抱きしめてしまうほどだ。あと一歩という所を見計らって、妹のしたことと云ったら、ないじゃないか。なぜあの男は、すんなり妹の結婚を認められなかったのかしら。なぜじぶんがぶ男の癖に、糞尾の醜貌に醜さを感じたのか、己には渚(なぎさ)に敷きつまッた砂の一粒ほども、理解することが出来ない。そういう面から云ったら、矛盾の多い人間よりも、己たち悪魔の方が、どれほど純粋な生き物に出来ているのだか、

しれないものだね。』

＊　＊　＊

幹彦は、静かな床に身を横たえて、閉じ合わさった目ぶたを一つあけた。己の心のように朧々した天井も、醜貌を隠した灯の外も、いつかすッかり朝になった。ま横へ顔をねじると、真夏の強い日差しが、雨上がりの庭の面を、カッと照らしながら、キラキラと水っぽい細かい光を風に揺らしていた。

昨夜、兄妹がのぞき込んだ手鏡は、その銀の唐草（からくさ）を見せながら、静かに面を伏せていた。妹はすでに床を上げた後で、この部屋には残り香さえ立ち去った後だった。

彼は起きるともなく起き上がって、畳をよちよち這いながら、縁側まで顔を出すと、ことさら大きく尻餅を突いて、庭先へ両脚をぶら下げた。

そこへ涼しい服装（なり）をした妹が、これもまた涼しい目を庭の薔薇の花壇へ合わせながら、風のよく通る廊下を素足にすえて来た。その先の幹彦は、ぼんやり煙草を銜えながら、勿論この妹に気にもとめなかった。彼は、昨夜に見た夢の余りに強烈だったので、全身にすさまじい光りを受けた後のように、いつまでも余韻と強い印象とが頭から抜けないでいた。

「おいお前、もう起きていたのかい。」

「え。」

「それじゃあ僕の昨晩に云ッた言葉の内で、一つだけ誤っていた点があるから、ここで訂正しておくよ。」

「誤り？　そんなら、どんな誤り？」

「うん。昨夜の僕は、確か、この面ひとつで、恋もでき、この面ひとつで、一生女に愛されない、と云ったんだね。」

「ふむふむ現にそういったわ。それが誤っていたのかしら？」

「ああそうさ。世の中にはね、自分の兄を救う為に、僕よりもぶ男をつかまえて、ひっしに一目惚れをねだるような、そんな酔狂な女もいた、ということだよ。」

それから幹彦は庭下駄になって、真夏の日の光を浴びながら、庚申薔薇の蕊についた一露を見下ろすと、じッと何かを考えていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9298g/

醜い男

2010年10月8日15時14分発行